様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６８３

研究課題名（和文）琉球語の敬語・指示詞の体系解明と南琉球八重山地方諸方言の総合的記述を行う研究

研究課題名（英文）A Study of the Grammatical System for Humble Words and the Demonstrative Construction in Ryukyuan, and the Conservation of the Endangered South Ryukyuan Language

研究代表者
荻野　千砂子（OGINO, Chisako）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０３３１８９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：南琉球語八重山宮良方言のウヨーフン（「差し上げる」相当語）は、主語を軽度に高めつつ、補語を高める機能を持つことを発見し謙譲語αと命名した。また、他者を高める条件下では一人称へ係る敬意を無視でき自敬を許容することを発見した。謙譲語αは北琉球語の喜界島と与論島方言にも見られた。さらに、喜界島方言では、素材敬語が対者敬語へと機能を拡張する現象を発見した。
指示詞研究では、宮良方言の文脈指示が現場指示と同じく「相対的距離」が基盤となっていることを明らかにした。また、自然談話を採取し、南琉球語の保存を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一人称寄り視点がないという観点から、琉球語の敬語を分析し、古代語と比較研究するという試みは、独創性がある研究として2013年度の新村出記念財団研究奨励賞を受賞した。現在、古代語のように「謙譲語＋尊敬語」で二方面敬語を作る敬語文法は本土方言にないため、古代語の敬語を再考する上でも琉球語の研究は学術的意義がある。また、2009年2月にユネスコは、琉球語は消滅の危機に瀕する言語であると発表した。特に南琉球語の八重山地方は危機度が高く、高齢者しか流暢に話せない現状がある。そのため早急に談話を採取し資料化し、録画や録音データを蓄積することは、社会的文化を守るためにも価値が高い。

研究成果の概要（英文）：The humble word uyoohun in the Miyara dialect,South Ryukyuan,has the function of indicating that the receiver is of higher status. However,it also has the function of indicating that the giver is of slightly higher status. Such humble words have never been found in Japanese, so I named it “humble word α”.Besides,in cmmon Japanese,it is prohibited for speakers to show honor to themselves.However,in the Miyara dialect that is acceptable if the speaker owes respect to others and/or if the speaker is owed respect by others.Humble word α” has also been found in the Kikai and Yoron dialect,North Ryukyuan.Even more,I found that the honorific word also has the extended function of raising the listener’s status in the Kikai dialect.
Using the demonstrative in context resembles using it in the situation where relative distance is relevant,as in the Miyara dialect. Ku/u/ka-series demonstratives are used, u-series is used to refer to the former noun firstly, and after that, ku-series is used.

研究分野：日本語学

キーワード：謙譲語α　琉球語　主語恭敬機能　二方面敬語　自敬　指示詞　相対的距離

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の琉球語研究は、現代共通語を翻訳する方法で分析する方法が主流である。しかし、2013年～2015年の基盤研究Ｃでは、南琉球八重山宮良（みやら）方言を古代語（室町時代以前の中央語。以下同様）を基として考察することにより、従来の研究では気づかなかった現象を炙り出すことに成功した。古代語を介した研究方法の有効性が示されたのである。具体的な発見点と、明らかにできなかった点は以下の通りである。

（１）謙譲語に見られる主語尊敬機能

宮良方言の「Ｘが私に花束をウヨーフン」の文は自分を敬うとして非文となるため、ウヨーフンは補語を高く位置づける謙譲語「差し上げる」相当語の機能を持つ。しかし、共通語と異なり「謙譲語＋尊敬語オールン（共通語「～ なさる」相当語）」で二方面敬語を作ることができる。例えば「知事が私のおじへ花束を ウヨーホールン（共通語「差し上げなさる」相当語）」のように「主語（知事）＞補語（私のおじ）」の関係でも使用できる。古代語の「奉り給う」も「主語≧補語」での使用例があるため、酷似する現象だと言える。古代語の二方面敬語の研究では、謙譲語で補語の人物を高く位置付け、尊敬語で主語の人物を高く位置づけるとし、それぞれの敬語は関連せず、主語と補語の関係は無視できるとされていた。しかし、宮良方言のウヨーフンを単独で調査すると、ウヨーフンに補語尊敬と主語尊敬の両方の機能があることが明らかになった（口頭発表：荻野千砂子(2013)「二方面敬語を作る謙譲語－石垣宮良方言と古代語－」第 96 回日本方言研究会）。だが、謙譲語に主語尊敬機能があるという指摘は従来の敬語研究になく、具体的な機能については未解決であった。また、謙譲語に主語尊敬機能があると、一人称主語の場合に自敬となるはずだが、それが許容される仕組みが解明できなかった。以上、宮良方言の二方面敬語には、古代語の二方面敬語と酷似する現象が見られるが、同じ原理で説明できるか分からなかった。

（２）話し手からの相対的距離が重視される指示詞

宮良方言の指示詞は共通語の「こ・そ・あ」の三体系指示詞とは異なる三体系をなす。宮良方言の指示詞には ku 系、u 系、ka 系指示詞がある。古代語の指示詞も、現代語とは異なることが指摘されているため、宮良方言の指示詞も異なる機能があるのではないかと考えた従来の研究では、ku 系、u 系、ka 系指示詞は、近称、中称、遠称に対応するとされていたが、物理的な距離よりも、相対的な距離が重要であることを明らかにした。単独の物を指す場合にはデフォルトで uri を使用する。複数ある物を対比するときには、その物が二つとも話し手の近くにある場合は、uri と kuri（「これ」と「これ」相当）で指し、一方が話し手に近く、一方が遠くにある場合には、uri と kari（「これ」と「あれ」相当）を使用することを明らかにした（口頭発表：荻野千砂子「南琉球八重山地方石垣宮良方言に 指示代名詞」2015 年度秋季大会　日本語学会）。古代語でも、鎌倉時代の『平家物語』で、聞き手側（二人称領域）にある物をアレと指す例があり、聞き手を遠称で指す用法は相対的な距離を表している可能性を指摘した。以上のように、現場指示用法は明らかにできたが、文脈指示用法や指示副詞用法は未調査のままであった。

これらの研究は同時に古代語を再考する研究の契機ともなりえるため、古代語の研究を宮良方言からアプローチすることにより、新たな知見を提示することが可能になると考えた。

２．研究の目的

本研究では、前研究での不明点を明らかにすることと、その過程で生じるであろう、新たな課題に取り組み、追究することを目的とした。また、南琉球語は消滅の危機に瀕している言語でもあるため、言語事象の分析をしつつ、資料として保存することを目的とした。

（１）敬語の仕組みの究明

①　謙譲語の主語尊敬機能の究明

宮良方言の謙譲語に主語尊敬機能があることは予測できたが、それが見かけ上のものか、実際に主語を高める機能があるかを明らかにする。また、宮良方言では、謙譲語を単独ではなく、「謙譲語＋尊敬語」の二方面敬語で使用する。その際、「知事が私のおじへ花束をウヨーホッタ（謙譲語ウヨーフン＋尊敬語オールンで「差し上げなさる」相当語）」のように使用でき、主語の「知事」の方を、補語の「私のおじ」よりも高く位置づけることが可能であることも分かっている。だが、主語の方をより高く位置づけることになる仕組みが不明のままであったので、その点を明らかにする。

②　自敬の仕組みの解明

謙譲語は、「Ｘが Ｙに Ｚを差し上げる」のように三項動詞を取る。人物が三人称の Ｘと三人称の Ｙのときに、どちらも高く位置づけることは理解できる。しかし、主語の Ｘが一人称を取ると自分を高く位置づけるため自敬となり、認められないはずである。主語尊敬機能があるのに、なぜ一人称主語が許容されるのか、理由が不明であるため、その仕組みを明らかにする。

（２）文脈指示用法の究明
　現場指示用法は明らかにできたが、文脈指示用法と指示副詞用法は未解決であったため、それぞれの仕組みを究明する。

（３）南琉球語の謙譲語や指示詞の用法の一般化と北琉球語や古代語との比較
　宮良方言とその他の八重山地方の諸方言との間には互いに通じないぐらいの方言差があるため、謙譲語の機能が同じであるか、確認を行う。具体的には、同じ石垣島でも中心部の四箇字方言や北部の川平方言や竹富町黒島方言や西表島舟浮方言で調査を行う。宮良方言と同じ現象が見つかれば、南琉球語として一般化ができる。また、琉球語は北琉球語（奄美・沖縄本島）と南琉球語（宮古・八重山）とで言語としての差が大きい。北琉球語の喜界島方言や与論島方言で調査をし南琉球語と比較することで、琉球語として一般化が図れるか確認する。さらに、古代語との類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

（４）消滅の危機に瀕した南琉球語の保存
　ユネスコは琉球語を消滅の危機に瀕する言語と認定した。特に南琉球語の八重山地方は 70～80 歳代の高齢者しか流暢に話せない状況で、消滅の危機度が高い。総合的な言語記述と言語保存に向けた取り組みを並行して行うことを目的とする。

３．研究の方法
（１）敬語に関する調査方法
①　モデル化した人物関係を設定
　社会言語学での敬語の調査は、当該地域の具体的な人物を踏まえて調査をするのが通常の方法であるが、本研究では謙譲語の文法的機能を明らかにすることを目的とするため、モデル化した人物を想定し、各地域で統一的な調査データを取り、比較することとした。宮良方言では、年齢が絶対的な上下関係の指標となるので、異なる年齢の人物を複数人想定して、「ＸがＹに花束をウヨーフンそうだ」や「ＸがＹに花束をウヨーホールンそうだ」の文を作成して、敬語の許容度を調査することとした。このようにして得られた宮良方言でのデータを元に、他の地域ではどうなるか、比較を行うこととした。

②　主語尊敬機能を数値化するためのコインを用いた調査の考案
　謙譲語の主語尊敬機能がどの程度あるのか、コインを用いた独自の調査方法を考案した。コインを 10 枚用意して、コインの数が多いほど高い敬意を表すとした。「ＸがＹに花束をウヨーフンそうだ」の文で、話者がＸやＹの人物をどの程度敬っているかを、コインの数で示す調査をした。これにより、主語尊敬機能が数値化することを目指した。

③　自敬に関する包括的な調査
　自敬の仕組みを解明するために、一人称主語の場合だけでなく、一人称補語の場合も考察することとした。「Ｘが私に花束をウヨーホールン」の文は、「自分敬い」とされ非文となる。だが、一人称複数主語を取る勧誘用法では、目上の人物に対して「*一緒にいらっしゃいましょう」と言える。現代共通語では主語に一人称が含まれているため自敬となり、非文と判断される文である。そこで一人称複数「私たち」が補語になる場合の許容度を調べることとした。「X さん、私達に花束を差し上げて下さい」に相当する文を作成した。その場合の一人称複数「私たち」とは、どのような人物が含まれるかも調査することとした。これにより自敬の問題を総括的に捉えられるのではないかと考えた。

（２）文脈指示詞の調査
　現場指示の指示代名詞の使用では、相対的距離が重視されることが分かった。そこで、文脈指示にも同様な機能がある可能性を考え、例文を作ることとした。また指示副詞「こう、そう、ああ」に相当する anzi、kanzi に関しては未解明であるため、継続的な調査を行うこととした。

（３）北琉球語での授受動詞体系の確認と敬語の確認
　北琉球語の授受動詞体系を人称制約の有無の点を重視して調査することとし、一人称をどのように位置づけるかも確認することとした。また、基本的な尊敬語や謙譲語の語彙や用法について調査をすることとした。調査方法としては、南琉球語との比較をするため、宮良方言で使用した謙譲語での人物関係を主として利用することとした。

（４）自然談話の採取と分析
　自然談話を可能な限り採取し書き起こして保存する。書き起こしの過程で、ヴォイスとアスペクトや条件表現など、日本語の古代語との比較研究が可能な現象に関しては、重点的に補充調査を行う。例えば、宮良方言では、仮定条件で-aba〈未然形＋ば〉形式と-ukka 形式〈已然形＋ば〉の形式がある。黒島方言では、-aba〈未然形＋ば〉形式と-iba〈已然形＋ば〉がある。「未然形＋

ば」や「已然形＋ば」の形式は古代語との対比が可能な現象であるが、これらの用法に関して詳細な記述がなされていないのが現状である。消滅の危機にある言語のため、可能な限り例文を取ることとした。

４．研究成果

（１）琉球語の敬語の特徴

宮良方言には、主語を軽度に高め、補語を高く位置づける謙譲語αがあること、自敬の許容ができることを発見し、北琉球語にも謙譲語αと同様の機能が見られることを確認した。同じ南琉球語でも竹富町黒島では、謙譲語αや自敬の許容度に関して、基盤とした宮良方言と一部異なる現象が見られた。謙譲語αの研究は、当初予測したよりも大きなテーマを含むため、古代語の謙譲語に関しては別の機会に論じることにした。また、北琉球語喜界島方言では、素材敬語である尊敬語が聞き手を尊敬する機能を帯びる現象が見られることを発見した。さらに北琉球語では、授受動詞体系で補助動詞用法に南琉球語との相違点が見られることが明らかとなった。以下に敬語に関する研究成果の具体的な内容を述べる。

①　宮良方言での謙譲語αの発見

共通語の謙譲語Ｉは「差し上げる」に見られるように、補語の人物を高める機能を持つ。その際、主語は補語よりも相対的に低くなる。しかし、宮良方言のウヨーフン（「差し上げる」相当語）は謙譲語として補語を高める機能を持ちながら、同時に主語も軽度に高める機能を持つことを明らかにした。主語を高める機能は、最大で「上位者主語＝上位者補語」までであり、尊敬語として主語を積極的に高める機能はない。主語が補語に対して恭しく物を捧げる行為と、その行為を行う主語への話し手の敬意が混在しているものであると考え、この機能を「主語恭敬機能」と命名した。補語と同時に主語を高める謙譲語は、現在の研究では指摘されておらず、新たに「謙譲語α」と呼ぶことを提唱した。

また、謙譲語αは、「下位者主語→上位者補語」の授与方向を重視し、補語が話し手と同位者や下位者であっても、主語がさらに下位者であれば、使用ができる。例えば、話し手が 40 歳、補語が同級生の香 40 歳、主語が弘 25 歳の場合、弘への依頼として「弘、香に花束をウヨーヒフーヌ（差し上げてくれないか）」と言える。この場合、話し手の私は友人の香（同級生）を高く位置づけるわけではない。現代共通語の謙譲語は話し手が補語を高く位置づける機能を持つが、宮良方言では、「下位者主語→上位者補語」の相対的な上下を重視し、上位者への授与方向を表すことを優先する機能があることを発見した。

さらに、謙譲語αは、補助動詞の尊敬語オールン（「～なさる」相当語）を伴い、「謙譲語＋尊敬語」の二方面敬語で用いることが可能である。宮良方言のウヨーフンの場合、ウヨーホールン（「差し上げなさる」相当語）となる。このとき、「上位者主語＞下位者補語」での使用が許容される。「知事（上位者主語）が私のおじ（知事より下位者の補語）に花束をウヨーホーッタ」で、主語の「知事」の方を高めることができる仕組みを明らかにした。これは、ウヨーフンで「上位者主語＝上位者補語」まで両者を高めたあとに、補助動詞の尊敬語オールンで、さらに主語を高めることができるため、主語の「知事」をより高めることが可能であるという説を提唱した。

同じ南琉球語でも黒島方言のウヤス（「差し上げる」相当語）では単独で「主語＞補語」の用法が許容される割合が高く、「謙譲語＋尊敬語」の二方面敬語ウヤシワールンでも、宮良方言より使用範囲が広かった。同じ南琉球語でも異なる敬語のルールがあることが予測され、黒島方言については仕組みが分からず、新たな課題となった。

②　南琉球語の自敬の許容

現代共通語では一人称を高めることはできない。だが、宮良方言では、「一緒に行きましょう」という勧誘表現において、聞き手が上位者の場合に「先輩、一緒に oor-a（いらっしゃいましょう）」と尊敬語を使わなければならない。宮良方言でも「自分を敬ってはいけない」とされ、自敬は禁忌である。しかし、上位者が含まれる行為の場合、上位者への尊敬語が優先され、結果としての一人称へ係る尊敬を無視して許容する仕組みがあることを発見した。これを「上位者優先のルール」と命名した。

この「上位者優先のルール」により、謙譲語αのウヨーフンでも、私と同級生の香の二人が受賞しているとき、甥の弘に対して「弘〈25 歳〉、私たち〈40 歳〉に花束をウヨーヒ　フーヌ（差し上げてくれないか）」と言えることが明らかとなった。これは下位者の弘から上位者の香への方向を優先して、補語に一人称が含まれていても一人称へ係る敬意は無視され、自敬に見えても使用が許容されることを明らかにした。

③　南琉球語としての謙譲語αの一般化と北琉球語での謙譲語αの確認

まず、謙譲語αが、八重山地方の石垣市四箇字の方言、石垣島北部の川平方言、竹富町の黒島方言、竹富町西表島の船浮方言に見られることを確認した。これによって、南琉球語の八重山地方では、広く見られる現象であることが確認できた。

琉球語の中で、北琉球語（奄美・沖縄本島）と南琉球語（宮古・八重山）は、意思疎通が不可

能なほど言語としての差がある。宮良方言と同じ調査票を用いて、北琉球語の鹿児島県大島郡喜界島と与論島の調査し、喜界島方言では、聞き手が上位者の場合に主語恭敬機能が見られること、与論島方言では、聞き手に関わらず同様の現象が見られることが分かり、北琉球語でも謙譲語αがあることが確かめられた。

④　北琉球語の尊敬語の補助動詞用法に見られる拡張機能の発見

喜界島方言では、聞き手が目上の場合に「動詞の語幹＋eer」の形式を用いる。一見すると、形態素 eer が共通語の「です・ます」に相当する丁寧語の機能を持つように見えるが、従属節では主語尊敬を表す用法があることを確かめた。ここから、「動詞の語幹＋eer」は、聞き手への敬意を表すために、もともと主語尊敬機能を有していた eer が、聞き手尊敬へと機能を拡張した可能性を考えた。このことを元にして、補助動詞の尊敬語（集落によって-iNsooin、-iNsoojuN、-iNsjoojuN、-iNpjoojuN の形態がある）を調査したところ、主語尊敬機能の他に、主語ではなく聞き手への尊敬を表す機能があることが確認できた。

（２）授受動詞体系の記述

①　北琉球語喜界島方言の授受動詞体系の確認

北琉球語の喜界島方言では、本動詞の授与動詞は「くれる－くれる」で人称制約がなく、受納動詞は「もらう」を用い、同じく人称制約がないことを明らかにした。だが、南琉球語との相違として、一部の集落では「あげる」が用いられることも分かった。また、補助動詞用法を調査したところ、授与動詞で「～てくれる」と「～てとらす」と「～てやる」が混在して使用できることが分かった。これは南琉球語には見られない現象であった。本動詞では「やる」も「とらす」も授与動詞としては機能しないため、補助動詞用法でのみ使用できることになる。これらの機能については不明な点が残り、今後の課題となった。

②　中世語の「とらす」と近世語「あげる」の発達状況

授与動詞としての「とらす」が北琉球語で補助動詞として使用されていることが分かり、本土方言での「とらす」の史的変遷について検証した。時代としては中世末期の室町時代末に授与動詞化したことが分かった。「とらす」は「上位者→下位者」での授与の場合に使用され、下位者が望んでいる事柄、物を与える場合が多いことが分かった。また、「あげる」は近世前期と中期では用法が異なることが明らかとなった。「あげる」は近世前期では年貢上納など、上位者へ物を献上する場面で多用され、現代語「あげる」のような「無償で物の所有権を授与する」用法は見られなかった。むしろ、補助動詞「～てあげる」の方が時代的には先に発達していることが分かった。よって、補助動詞「～てあげる」の発達によって、本動詞に「無償で物の所有権を授与する」用法が生じた可能性を述べた。これは従来の文法化の理論とは逆行化する考えである。

（３）南琉球語の指示詞

①　宮良方言と黒島方言での指示詞の特徴

宮良方言の文脈指示では、現場指示と同じく相対的距離が基盤となっていることが明らかとなった。現場指示では ku/u/ka 系の三体系があり、概ね「近称/中称/遠称」に対応するが、距離が同じであれば両手に持った物を、u 系と ku 系で指すことが可能であった。文脈指示用法では、先行名詞を u 系で指示するが、後にくる名詞は ku 系で指示することができることが分かった。指示副詞は、宮良方言では二項対立の anzi と kanzi がある。だがこの二語の相違点に関しては、調査で明らかな差異を出すことができず、今後の課題となった。また、同じく南琉球語の竹富町黒島方言の現場指示用法と文脈指示用法も調査をした。用法としては宮良方言よりも相対性が強いことが明らかとなった。文脈指示用法は、宮良方言とは異なる点があり、調査中である。

②　南琉球語船浮方言の現場指示

西表島船浮方言では、物指示では ku 系（近称）/u 系（遠称）の二体系あり、宮良方言や黒島方言とは異なることが分かった。しかし、場所を表す指示詞は u 系（近称）/ku 系（近称）/ka 系（遠）の三体系であり、現場指示用法で二系と三系の体系が混在していることが分かってきた。これらは、まだ調査の途中である。

（３）消滅の危機にある琉球方言の簡易文法記述

南琉球語の宮良、黒島、船浮、川平で採取した自然談話を、話者に確かめながら書き起こしをする作業を断続的に進め、絶滅に瀕する南琉球語を保存する作業を行った。その過程で、以下のようなテーマを発見した。

まず、一つ目は、黒島方言の形容詞語幹の重複形に 2 通りのメロディーがあり、意味が異なる事象があることを発見し口頭発表を行った。また、南琉球語西表船浮方言の格助詞ととりたて助詞に関する論文をまとめた。西表島方言として祖納（そない）方言の記述と比較した結果、ほぼ似ているものの、若干異なる点も見つかった。さらに船浮方言の動詞と形容詞とアスペクトに関する調査を行い論文にまとめた。また、「未然形＋ば」「已然形＋ば」で表される条件表現に関してテンスにおいて古代語と酷似する現象があることを確かめたが、不明な点もあり調査中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 荻野千砂子	４．巻 0
２．論文標題 南琉球石垣宮良方言のタボールン系語彙の主語	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『坂口至教授退職記念　日本語論集』	６．最初と最後の頁 127-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荻野千砂子	４．巻 3
２．論文標題 近世前期の授与動詞の諸相－トラス、アゲルを中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『日本語語用論フォーラム』	６．最初と最後の頁 105-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荻野千砂子	４．巻 1
２．論文標題 八重山地方西表島船浮方言の談話資料	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『シマジマのしまくとぅば　危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	６．最初と最後の頁 131-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荻野千砂子	４．巻 1
２．論文標題 八重山地方石垣島川平方言の動詞の特徴	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『シマジマのしまくとぅば　危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	６．最初と最後の頁 104-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 1
2．論文標題 八重山地方西表島船浮方言の動詞・アスペクト・形容詞について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	6．最初と最後の頁 164-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 1
2．論文標題 八重山地方竹富町黒島方言の『桃太郎』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	6．最初と最後の頁 184-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 14-4
2．論文標題 南琉球石垣市宮良(みやら)方言のujoohuN -視点がない授受動詞の謙譲語-	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『日本語の研究』	6．最初と最後の頁 14-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.14.4_14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 1
2．論文標題 沖縄県西表船浮方言	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	6．最初と最後の頁 201-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 58
2．論文標題 西表島船浮方言の格助詞ととりたて助詞	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『福岡教育大学国語科研究論集』	6．最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子・原田走一郎	4．巻 平成28年度
2．論文標題 沖縄県黒島方言の動詞・形容詞・談話	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	6．最初と最後の頁 145-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野千砂子	4．巻 平成28年度
2．論文標題 沖縄県西表船浮方言	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』文化庁委託事業報告書	6．最初と最後の頁 203-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 荻野千砂子
2．発表標題 沖縄県竹富町の黒島の謙譲語α「差し上げる」の機能と自敬について
3．学会等名 第49回九州方言研究会
4．発表年 2020年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 竹富町黒島方言の 尊敬語waaruNの用法 －主語尊敬からの拡張機能－
３．学会等名 2019年度（第42回）沖縄言語研究センター 総会・研究発表会・シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 自敬の許容範囲－南琉球八重山石垣宮良方言－
３．学会等名 第23回東アジア日本語教育・日本文化研究学会　国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 北琉球語喜界島方言の授与動詞
３．学会等名 日本語学会2019年度秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 授受動詞「あげる」の発達
３．学会等名 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 第22回　国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 鹿児島県喜界島方言の尊敬語－主語尊敬と聞き手尊敬の関係－
３．学会等名 日本語学会2018年度秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 喜界島方言の授受動詞と敬語の体系について
３．学会等名 沖縄言語研究センター総会・研究発表会
４．発表年 2017年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 形容詞語幹の重複の用法 －南琉球石垣宮良と竹富町黒島での用法－
３．学会等名 第21回東アジア日本語教育・日本文化研究学会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 主語尊敬を含む謙譲語の仕組み　　－八重山宮良方言－
３．学会等名 九州大学国語国文学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 北琉球・喜界島の「タボールン」－南琉球・八重山地方のタボールンとの比較－
３．学会等名 第42九州方言研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 荻野千砂子
２．発表標題 西表船浮方言の格助詞ととりたて助詞
３．学会等名 第267回筑紫日本語研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考